

【研究ノート】

羽鳥卓也のリカード研究

福田進治

はじめに

スラッフア編『リカード全集』（1951-1971）刊行後、欧米のリカード研究はスラッフアのリカード解釈の影響の下で展開してきたが、日本のリカード研究はスラッフアの影響を受けながらも、これを批判的に克服し、独自の道を歩んできた。すなわち、日本の研究者たちは、スラッフアの初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈を早い時期に批判し、独自の初期リカード解釈を確立するとともに、初期以降のリカードの労働価値理論の発展過程を綿密に検討し、卓越した研究成果を生み出してきた¹⁾。こうした研究を先導し、その後の日本のリカード研究史の中で長らく中心的役割を果たしてきたのが、羽鳥卓也（1922-2012）である。

2012年12月に羽鳥が他界して以来、羽鳥の人柄や業績について盛んに議論が行われてきた。翌年には、第164回経済学史学会関西部会及び第28回リカード研究会において、追悼シンポジウムが各々開催された²⁾。また、同年の『経済学史学会ニュース』及び『マルサス学会年報』には、追悼記事が各々掲載された³⁾。筆者もこれらの企画に参加し、また記事を読み、日本のリカード研究史における羽鳥の業績の重要性を再確認しているところである。羽鳥の業績はそのほとんどが日本語で発表されていたため、欧米の研究者にはあまり知られていないが、今日振り返っても、多くの点で欧米の研究に対する優位性を持っているように思われる。

本稿の課題は、こうした羽鳥のリカード研究を振り返り、その現代的意義を再確認することを通して、日本のリカード研究の独自性を再検討することである。ただし、羽鳥の多くの業績を網羅的に紹介するのではなく、スラッフアのリカード解釈の批判とその後の日本のリカード研究の展開という点からとくに重要であると思われるいくつかの論点を振り返り、その研究の目的と方法について再考し、羽鳥のリカード研究の特色を明らかにすることとしたい。

1 羽鳥卓也のリカード研究

最初に、羽鳥のリカード研究の経緯を概観しておきたい。羽鳥は1922年、岐阜県に生まれ、第2次大戦を経て慶應義塾大学を卒業、民間企業に勤務した後、1940年代末頃から研究者の道を歩み始

めた。その後、羽鳥は単著・共著を含めて、以下の9冊の研究書を上梓した。

- 『近世封建社会の構造』(1951、共著)
- 『近世日本社会史研究』(1954)
- 『市民革命思想の展開』(1957)
- 『古典派資本蓄積論の研究』(1963)
- 『古典派経済学の基本問題』(1972)
- 『リカードウ研究』(1982)
- 『国富論研究』(1990)
- 『リカードウの理論圏』(1995)
- 『経済学の地下水脈』(2012、共著)

このように羽鳥は当初、近世日本社会史の研究者として研究生活を開始していた。最初の2冊はこの分野の研究書である。しかし、『市民革命思想の展開』において近世ヨーロッパの社会思想を検討したことが契機となり、これを足がかりとして、1950年代末頃から古典派経済学の理論的研究に本格的に取り組むようになった。その最初の成果が『古典派資本蓄積論の研究』である⁴⁾。この中で、羽鳥はスラッファ編『リカードウ全集』を資料として用いながら、リカードの経済学の基本的性格に言及したり、リカードの機械論や資本蓄積論を検討したりしたが、スラッファのリカード解釈にはとくに言及していなかった。しかし、1960年代中葉から、羽鳥はスラッファのリカード解釈を精力的に検討するようになった⁵⁾。そして、その成果として『古典派経済学の基本問題』を上梓した。この中で、羽鳥はスラッファの初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈に疑問を呈し、また、スラッファのリカード『原理』の理論構造に関する解釈を批判し、自身の見解を対置した。こうした羽鳥の研究に刺激を受けて、日本のリカード研究の独自の道が始まったのである。1970年代以降、羽鳥はさらにスラッファのリカード解釈を検討し、あるいはスラッファの解釈を道標としながら、初期リカードの利潤理論、初期以降のリカードの労働価値理論の発展過程、晩年のリカードの価値尺度論の研究に取り組んでいった。これらの成果は『リカードウ研究』にまとめられた。1980年代以降は、羽鳥はリカード研究をさらに推し進めるとともに、スミス研究やマルサス研究にも精力的に取り組むようになった。スミス研究の成果は『国富論研究』にまとめられ、さらなるリカード研究の成果は『リカードウの理論圏』にまとめられた。マルサス研究は研究書という形にはまとめられなかったが、多くの研究論文が発表された。1990年代以降の羽鳥はとくにマルサス研究に集中していた。最後の著作となった2012年刊行の『経済学の地下水脈』に収録されたのも「マルサスの戦後不況論」だった⁶⁾。

以上のように、羽鳥は1960年頃から古典派経済学の理論的研究に取り組むようになり、最晩年に至るまでその歩みを止めることはなかった。羽鳥はスミス研究やマルサス研究にも精力的に取り組んだが、彼の経済学史研究の中核はやはりリカード研究だった。羽鳥はリカード研究を開始した頃にスラッファのリカード解釈から刺激を受けたに違いない。そして、スラッファのリカード解釈を

批判的に克服することが、彼のリカード研究の主要な動機となり、その後の彼の経済学史研究の方向性を決定づけたと思われる。さらに、羽鳥の研究が刺激となって、スラッフアのリカード解釈の批判的克服という課題は、その後の日本のリカード研究の性格を決定づけたように思われる。

以下では、羽鳥のリカード研究のうち、『古典派経済学の基本問題』及び『リカードウ研究』の内容を中心に検討していきたい。

2 スラッフア批判の開始 —『古典派経済学の基本問題』(1972)—

本章では、羽鳥の『古典派経済学の基本問題』の第4章「初期リカードウの価値と分配の理論」及び第5章「リカードウ蓄積論の基本構成」を中心に、スラッフアのリカード解釈に対する羽鳥の批判を概観する。

同書の第4章で、羽鳥は初期リカードの利潤理論を検討し、スラッフアの「穀物比率論」解釈に疑問を呈した。1814年頃のリカードは「他のあらゆる産業の利潤を調整するものは、農業者の利潤である」(RW, IV, p.104)と述べていたが、その「合理的基礎」として、スラッフアは当時のリカードは「穀物比率論」を採用していたと主張した。すなわち、リカードは農業部門の投入と産出がともに「穀物」のみからなると仮定していたため、農業利潤率は価値決定の問題に先行して「穀物比率」として決定し、必然的に他の産業の利潤率を規定すると考えていたという。スラッフアは現存の文献資料の中では、リカード自身がこうした仮定を明示的に述べていないことを認めながらも、それらが「失われた論文」や会話の中で示されていたに違いないとして、そのことを示唆するという3つの文献的証拠を挙げた。以下のとおりである (RW, I, pp.xxxi-ii)⁷⁾。

- 1814年のリカードのマルサス宛書簡 (50)
- 1814年のマルサスのリカード宛書簡 (54)
- 1815年刊行の『試論』の「地代と利潤の増進を示す表」

これらの証拠は一見すると「穀物比率」の存在を示唆しているように思われるが、羽鳥はそれらを一つ一つ検討し、いずれもその存在を確実に示す証拠とは言い難いと主張した。すなわち、1814年のリカードとマルサスの往復書簡(50)及び(54)については、リカードが確実に「穀物比率」に言及しているとは言えないとし、1815年刊行の『試論』の「表」については、リカードは「穀物比率」を用いていたのではなく、「穀物」を価値尺度として用いていたという。こうして羽鳥は初期リカードが「穀物比率」を採用していたというスラッフアの解釈を否定し、むしろ当時のリカードは労働価値理論の確立を目指していたが、この段階ではスミスの支配労働＝価値尺度説を克服できずにいたため、「穀物」を価値尺度として採用していたという彼自身の解釈を提示した(羽鳥 1972, pp.197-205)⁸⁾。

ところで、同書は1972年に刊行されたが、第4章の初出論文「初期リカードウの価値と分配の理論」は1965年に発表されている(羽鳥 1965)。欧米では1973年にホルンダーがスラッフアの初期リ

カード解釈を批判する論文を発表している (Hollander 1973)。羽鳥のスラッフア批判がホランダーよりもかなり早いということは銘記されるべきである。

同書の第5章では、羽鳥はリカード『原理』の理論構造を検討し、やはりスラッフアの解釈に疑問を呈した。リカード『原理』の各章の配列は複雑であることが知られている。前半の理論的諸章は以下のとおりである。

- 第1章 価値論
- 第2章 地代論
- 第3章 鉱山地代論
- 第4章 価格論
- 第5章 賃金論
- 第6章 利潤論
- 第7章 外国貿易論

これらのうち、第2章地代論（及び第3章鉱山地代論）の位置がいかに不自然であり、最も理解しがたい。スラッフアは1820年のリカードのマカロック宛書簡（368）を傍証として挙げながら、リカードは賃金と利潤の分割を主要問題と考えており、この問題を単純化するために地代の問題を先立って捨象しようとして、第1章価値論の直後に第2章地代論を置いたという (RW, I, p.xxiii)⁹⁾。しかし、羽鳥はこうしたスラッフアの説明は不十分であり、労働価値理論との関係を理論的に検討しない限り、第2章地代論が第4章価格論よりも前に置かれた本質的な理由が分からないと指摘した。そして、『原理』初版の第1章価値論の叙述と1818年のリカードのミル宛書簡（298）を参照しながら、リカードはスミスの価値理論の立場を批判し、彼自身の労働価値理論は資本蓄積の進展や土地所有の普及の問題に妨げれないと考えていたと主張した¹⁰⁾。このためにリカードは第1章価値論の前半で純粋な労働価値理論の論理を確立した上で、第1章価値論の後半で資本蓄積（資本構成の相違）に関わる問題を検討し、続いて第2章地代論で土地所有（肥沃度の相違）に関わる問題を検討したという。こうして羽鳥はリカード体系を「価値と分配の理論」として把握するスラッフアの解釈を批判し、これを「労働価値理論に基づく所得分配と資本蓄積の理論」として把握する彼自身の解釈を対置したのである（羽鳥 1972, pp.272-81）¹¹⁾。

ところで、羽鳥はどのような経緯で上のようなスラッフア批判を展開するようになったのか。この点に関連して、1972年の第36回経済学史学会大会の中で「リカードゥ研究における西欧と日本」というシンポジウムが開催されている（1972年11月12日、松山商科大学）¹²⁾。このシンポジウムはスラッフアのリカード解釈の日本への導入と羽鳥のスラッフア批判の提起を踏まえて、今後の日本のリカード研究の方向性を展望しようという趣旨で開催された。この中で羽鳥は彼自身の研究の経緯について発言している。羽鳥によると、彼がリカード研究の方向性を模索していたとき、スラッフアの解釈が現れたので、当初はこれを歓迎したが、自分は内田義彦の影響を受けてスミスとリカードの関係を検討し、支配労働価値説と投下労働価値説の関係を再検討していたので、スラッ

ファのいう初期の「穀物比率論」から労働価値理論という転換が受け入れにくかったという（入江 1973, pp.11-12）。大雑把に言うなら、マルクス研究の影響を受けた日本のリカード研究者たちにとって、もともとスラッフアのリカード解釈は無理のある解釈であり、それが日本の伝統的な立場を覆すには至らなかったということであろう。しかし、そこにはマルクス研究の影響だけでなく、羽鳥の経済学史研究の方法に関する独自の立場がより本質的に関わっているように思われる。このことには後にあらためて言及する。

3 リカード研究の展開 —『リカードウ研究』（1982）—

本章では、羽鳥の『リカードウ研究』の主要な論点を検討し、羽鳥のリカード研究の特徴を明らかにする。同書は、第1部「初期リカードウの分配理論」、第2部『『経済学原理』の価値と分配の理論」、第3部「晩年の『絶対価値の尺度』の探索」に分かれており、全体を通して初期から晩年に至るリカードの労働価値理論の発展過程に関わる諸問題を検討する形となっている。

第1部で、羽鳥は初期リカードの利潤理論をあらためて検討し、その中で、千賀重義の「部門別利潤率規定論」解釈に対する支持を表明した。羽鳥のスラッフア批判を受けて、1970年代以降、日本のリカード研究者たちは大挙して初期リカードの利潤理論を検討した。そうした中で、千賀は「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」（1972）において、スラッフアの「穀物比率論」解釈を批判的に検討しながら、新しい「部門別利潤率規定論」解釈を提示した。すなわち、初期リカードは農業部門では「物量比率」の低下に従って利潤率が低下し、工業部門では「賃金－利潤相反関係」の論理に基づいて、賃金の上昇に伴って利潤率が低下するという「部門別」の利潤理論を保持していたという（千賀 1972, pp.88-92）。千賀の提案はさらなる議論を刺激したが、それらの中で最も微妙かつ重要な論点の一つが1814年のリカードのマルサス宛書簡（50）に見られる次の叙述の解釈であった。

「利潤率と利子率とは、生産にとって必要な消費に対する生産の比率に依存しなければなりません。この比率はまた、本質上、食糧の安価さに依存しており、この食糧の安価さこそ、我々が〔その作用に〕どのくらいの時間を認めようと自由ですが、結局、労働賃金の一大調整者であります。」（RW, VI, p.108）

この叙述はスラッフアが「穀物比率論」解釈の証拠の一つとして挙げたもので、スラッフアは「生産の比率」が「穀物比率」を意味すると考えていた（RW, I, p.xxxii）。しかし、この叙述を注意深く読むなら、「食糧の安価さ」が「労働賃金」を通して「生産の比率」を規定することが述べられているように思われる。この場合、「生産の比率」は明らかに価格タームの比率である。ところが、羽鳥はいずれの解釈にも満足せず、「生産の比率」が物的な投入－産出比率であるというスラッフアの解釈を認めた上で、農業部門では「生産の比率」が「利潤率」を規定し、工業部門では「食糧の安価さ」が「労働賃金」を通して「利潤率」を規定するという「部門別」の論理が述べられて

いると主張した¹³⁾。こうして羽鳥は千賀の「部門別利潤率規定論」解釈を支持し、千賀の解釈はその後の日本の初期リカード研究における支配的見解となった（羽鳥 1982, pp.16-25,36-45）¹⁴⁾。

同書の第2部で、羽鳥はスラッフアのリカード解釈を踏まえて、リカードの労働価値理論の修正問題を検討した。スラッフアはリカード『原理』第1章価値論の修正の経緯を検討し、リカードは『原理』初版から第3版にかけて当初の労働価値理論の立場から次第に後退していったという従来支配的だった「後退」解釈を否定するとともに、一連の議論の中で、賃金が増加するときには価値が増加するという問題から、資本の回収時間の相違のために価値が投下労働量に比例しなくなるという問題へと強調点の変化が見られることを指摘した（RW, I, pp.xxxvii-ix, xlvi-viii）。羽鳥はこうしたスラッフアの解釈をおおむね受け入れながらも、スラッフアの説明は不十分であるとして、スラッフアが十分に検討しなかった『原理』第2版以降のリカードとマルサスの論争を綿密に検討し、修正の経緯を詳細に明らかにした。こうして羽鳥は事実上、スラッフアの解釈を補強したといえる。その中でも困難な問題は、1820年のリカードのマカロック宛書簡（368）の叙述の解釈であった。次のとおりである。

「結局のところ、地代、賃金、利潤に関する重要な問題は、全生産物が、地主、資本家、労働者に分割される、価値の学説と本質的には関わらない比率によって説明されなければなりません。」（RW, VIII, pp.194）

この書簡には、リカードの労働価値理論の修正問題の強調点の変化や価値尺度の探求の詳細とともに、リカードが資本の回収時間の問題と価値尺度の選択の問題に頭を悩ませていたことが示されている。そして、上の叙述は所得分配の問題は労働価値理論と「本質的には関わらない比率」、すなわち物的タームの比率によって説明されなければならないと述べられており、あたかもリカードが労働価値理論を放棄したかのように見える。スラッフアはこの叙述を初期リカードが保持していた「古い穀物比率理論の反響」（RW, I, p.xxxii）であると見なし、あるいは修正問題の困難による「一時的な弱気の兆し」（RW, I, p.xxxix）にすぎないとした。いずれにせよスラッフアはこの叙述を本質的には重要でないと見なしている。しかし、近年、ハインツ・クルツは上の叙述がリカードの一貫した基本的アイデアを表しているから見なしながら、リカードは初期だけでなく、中期以降にも「穀物比率論」と同様の論理を保持していたと主張している（Kurz 2011, pp.5-6）¹⁵⁾。しかしながら、羽鳥は『マルサス評注』やこの時期のリカードの書簡を参照しながら、リカードは価値尺度の選択の問題に頭を悩ませていたが、労働価値理論の妥当性にはわずかな疑念も抱いていなかったと主張した。リカードの真意は、所得分配の問題は「価値尺度の選択という未解決の問題には本質的には関わらない」というものだったという（羽鳥 1982, pp.242-46, 269-95）¹⁶⁾。

同書の第3部では、羽鳥は晩年のリカードの価値尺度をめぐる議論を検討し、やはりスラッフアの解釈に疑問を呈した。スラッフアはリカードの価値尺度の探求の過程を検討し、その目的は賃金が増加するときにもそれ自身の価値が増加しない「不変の価値尺度」を探し求めることだったと主張した。そして『原理』第3版において、「両極端の中間」の資本構成をもつ新たな価値尺度を提

案することによってこの問題を解決したという (RW, I, pp.xl-v)。しかし、羽鳥は晩年のリカードは投下労働量に厳密に比例する「絶対価値」を正確に測定するための価値尺度を探し求めていたのであって、この点で『原理』第3版の新たな価値尺度にも満足していなかったと指摘した。羽鳥は最晩年のリカードのミル宛書簡 (552) の次の叙述の引用した¹⁷⁾。

「12ヶ月にわたる1人の労働が1ヶ月間の12人の労働以上に値する。……5年間の利潤は1年間の利潤の5倍よりも多く、1年間の利潤は1週間の利潤の52倍よりも多いのであり、これが困難の大部分をもたらしています。……このところ、この問題について考えてみましたが、大した進歩はありませんでした。」(RW, IX, p.387)

ここでリカードは資本の回収時間の相違があるとき、利潤（そして価値）が投下労働量に比例しないという問題に頭を悩ませている。このようにリカードは『原理』第3版で提案した「両極端の中間」の価値尺度でも、資本の回収時間の相違の下で「絶対価値」を正確に測定する価値尺度としては満足できるものではないと考えていた。結局、リカードは価値尺度の選択の問題に満足な解答を見出すことができなかつたのである (羽鳥 1982, 420-21)。

4 リカード研究の方法 —『古典派資本蓄積論の研究』(1963)—

本章では、羽鳥のリカード研究の方法について検討する。前章までで、羽鳥がスラッフアのリカード解釈を吸収または批判しながら、彼自身のリカード研究を推し進めていったおよその経緯が明らかになったと思われる。以下では、こうした羽鳥のリカード研究の方向性を規定した彼の経済学史研究の目的と方法について考える。

羽鳥は最初の古典派経済学の理論的研究である『古典派資本蓄積論の研究』の序説「古典派資本蓄積論研究の方法」において、彼の経済学史研究または古典派経済学研究に関わる基本的立場について詳細に述べている。まず、その冒頭において、羽鳥は次のように述べた。

「およそ経済学史研究の目的は、ただ単に過去の経済学説の内容を正確に理解することにあるだけではなく、それを通じて究極的には資本主義経済社会のメカニズムの解明そのものにとって有効な迂回手段を提供することにある。したがって、古典派経済学について学ぼうとする場合にも、われわれは経済理論史上における古典派理論の意義と限界とを確定することに最大の努力を注ぐべきであろう。」(羽鳥 1963, p.7)

ここで羽鳥は経済学史研究の現代的意義に関わる問題について述べており、このために経済学史研究の主要な課題は理論的側面の検討でなければならないと主張している。しかし、これに続けて、羽鳥は次のように述べた。

「しかしながら、そうであるからといって、古典派の体系の中から、個々の理論的諸環を手当り次第に抽出し、それを個別的に後代の経済学における理論的達成と直接に対比してその欠陥を摘出してゆく、といった研究方法を専一的に採用してはならない、と私は思う。」(羽鳥

1963, p.7)

すなわち、羽鳥は古典派経済学の理論的側面の検討と言っても、現代経済学の立場を基準にして古典派経済学の論理を単純に断罪または断定していくような研究ばかりになってはならないと述べている。その上で、羽鳥は次のように述べた。

「当然のことだが、批判的研究は、それが行われる前に、あらかじめ批判すべき対象そのものの忠実な理解に達していなければならない。……古典派それ自体の論理に即してその理論体系を再構成するという作業をぬきにして、古典派の理論的欠陥ないし稚拙を暴露することだけに終始すれば、その批判の仕方がいかに鋭利もしくはエレガントであろうと、所詮は論理の遊戯に陥るものといわなくてはならない。」(羽鳥 1963, p.8)

ここで羽鳥は古典派経済学の理論的側面の検討のためには、その前提として、古典派に忠実に、古典派に内在して、古典派を解釈をすることを求めている。こうして羽鳥は経済学史研究あるいは古典派経済学研究において、現代的意義を重視する立場と歴史的事実を重視する立場の対立を克服しようとした。すなわち、過去の経済学の現代的意義を明らかにするためにこそ、その歴史的事実を重視しなければならないである。そして、羽鳥は歴史的事実を探求することなく現代的意義を解明しようとする研究を「論理の遊戯」とであると批判している。羽鳥の念頭には何があったのだろうか。この段階ではスラッフアのリカード解釈の本格的な検討は始まっていないから、恐らくは、この批判はマルクス研究者を含む日本人研究者のリカード解釈に向けられていたのではないかと思われる。しかし、その後、スラッフアのリカード解釈を本格的に検討するようになったとき、こうした羽鳥の批判的精神が刺激されたのではないだろうか。

さらに、羽鳥は古典派経済学の基本的性格に言及した。羽鳥によると、古典派経済学者たちもまた、当時としての現代的意義を意識して政治経済学の理論的研究に取り組んでいた。従って、古典派経済学は「歴史＝社会体制認識のための基礎科学」として評価されなければならないという。その上で、古典派経済学の特徴について次のように述べた。

「古典派経済学者は資本主義社会を構成する基本的経済的諸階級として、生産の三大要素（土地・資本・労働）の所有者たる地主・資本家・労働者という三者を措定したが、彼らは資本蓄積の進展がこれら諸階級の取得する所得範疇（地代・利潤・賃銀）に対していかなる影響を及ぼすかについて考察し、あわせて、所得分配の態様に生じた変化が逆に将来の蓄積の進展の仕方に対していかに反作用するかについて考察した。」(羽鳥 1963, p.9)

ここで羽鳥は実践的性格をもつ古典派経済学にとって、資本蓄積と所得分配が最も基本的な問題であると述べている。すなわち、古典派経済学は優れて「資本蓄積と所得分配の理論」であったという。さらに、羽鳥はこうした古典派理論の基礎となるのが古典派の労働価値理論であるという。こうした認識を踏まえて、羽鳥は次のように述べた。

「従来、古典派価値論は労働価値論に対する批判者の側からも擁護者の側からもしばしば議論の対象とされてきた。しかし、批判するにせよ、擁護するにせよ、どちらにしても、それに

先立って、古典派価値論が古典派の全体系の中でいかなる位置を占め、体系の基軸たる蓄積と分配の理論に対していかなる理論的關係にあるか、ということを経典派の論理に即して明らかにしておかなければならないと私は思う。」(羽鳥 1963, p.11)

ここで羽鳥は古典派経済学の研究のために、労働価値理論を検討すること、しかもそれを理論体系の中での關係性を踏まえて検討することが不可欠であると述べている。

「蓄積と分配との關係をまったく無視して、ただ単に価値論だけを抽出し、これを後代の価値論と直接に比較して功罪を論ずるのでは、論理学の訓練として役立つことはあっても、歴史認識の基礎科学としての経済学の理論的發展にとってはまったく無益であろう。」(羽鳥 1963, p.11)

そして労働価値理論を古典派の理論体系の中での關係性を無視して検討しようとするなら、羽鳥はそれを「論理学の訓練」にすぎないと批判している。すでに述べたように、羽鳥は歴史的事実を探究することなく現代的意義を解明しようとする研究を「論理の遊戯」であると批判していたが、ここでの批判も同じ趣旨であると思われる。その後、羽鳥はスラッフアのリカード解釈を「論理学の訓練」にすぎないと考えるようになったのだろうか。いずれせよ、羽鳥はスラッフア批判に先立って、彼自身の経済学史研究あるいは古典派経済学研究の方法を確立しつつ、古典派経済学を「労働価値理論に基づく所得分配と資本蓄積の理論」として把握していたのである¹⁸⁾。

おわりに

以上より、羽鳥のリカード研究のおよその経緯とその方法が明らかになった。欧米のリカード研究者の間では、スラッフアのリカード解釈をめぐる激しい論争が長らく続いてきた。それらはあるときは、スラッフア派のリカード解釈と新古典派なリカード解釈の間の党派的な対立であり、またあるときは、歴史的事実を重視する立場と現代的意義を重視する立場の間の研究方法をめぐる対立だった。しかし、羽鳥は特定の理論的立場からリカード理論を断罪または断定するような議論を批判し、リカード自身に忠実に解釈することを求めていた。このことは現代的意義を検討するためにこそ、歴史的事実に忠実でなければならないと言い換えることができるだろう。この意味で、羽鳥は欧米のリカード研究に見られたような対立を当初から克服していたのである。

すでに述べたように、羽鳥は日本近世社会史の研究者として出発しながら、近世ヨーロッパの社会思想の検討を経て、1950年代末頃から古典派経済学の理論的研究に本格的に取り組むようになった。折しも、スラッフア編『リカード全集』が刊行されて間もない頃である。羽鳥は当初『リカード全集』を資料として用いながら自身の研究を進めていたが、恐らくはスラッフアのリカード解釈を少しずつ検討していたのであろう。しかし、その頃には羽鳥自身の古典派経済学の基本的理解や古典派経済学研究の方法が確立していた。羽鳥は彼自身の立場とスラッフアの立場が相容れないことを次第に感じるようになり、1960年代中葉以降、スラッフアのリカード解釈の批判に精力的に取り組むようになったものと思われる。

羽鳥のリカード研究を概観すると、彼の研究対象がリカードの価値・分配・蓄積の議論に集中していることが分かる。羽鳥はリカード体系を「労働価値理論に基づく所得分配と資本蓄積の理論」として把握しており、その問題に関心を集中していたのである。しかし、今一つ、羽鳥の研究対象がスラッフアのリカード解釈に関わる問題に集中していることが分かるだろう。羽鳥のリカード研究は主に初期リカードの利潤理論と『原理』初版以降の労働価値理論の修正に関わる諸問題を扱っているが、リカード体系の中心に位置する『原理』初版の純粋な労働価値理論はほとんど扱っていない。羽鳥は彼自身のリカード解釈の体系を構築することよりも、スラッフアのリカード解釈を批判することに精力を注いだのである。

しかし、羽鳥は決してスラッフアのリカード解釈のすべてを否定したわけではない。むしろ、その多くの部分を評価し、彼自身の解釈に取り入れている。それでも、羽鳥の視点から見ると、スラッフアの解釈には歴史的事実を十分に顧みずに、スラッフア自身の理論的立場からリカード理論を断定しようとする点が数多くあった。そうしたスラッフアの解釈が日本のリカード研究にも影響を与えようとしていた。こうして羽鳥はスラッフアの解釈を吸収しながらも、これを批判的に克服することを彼自身のリカード研究の中心的な課題とするようになったものと思われる。そして、こうした羽鳥のリカード研究の方向性はその後の日本のリカード研究に受け継がれていった。

[謝辞] 筆者も晩年の羽鳥卓也教授から温かいご指導を賜った。ご冥福をお祈りする。なお、本稿は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)「リカードウが経済学に与えた影響とその現代的意義の総合的研究」(課題番号22243019)、基盤研究(C)「日本のリカード研究と欧米のリカード研究の比較検討」(課題番号22530193)の助成を受けた研究成果である。

注

- 1) 筆者は以前よりこうした問題に関心を抱きながら、日本のリカード研究と欧米のリカード研究の比較検討を行ってきた。福田2008; 2013a; 2013bを参照。また、日本のリカード研究史については、真実 2000; 水田 1985; 中村 2007; 千賀 2006を参照。
- 2) 第164回経済学史学会関西部会例会では、藤本建夫、渡辺恵一、新村聡、佐藤滋正、八木紀一郎の各氏をパネリストとして「羽鳥卓也先生追悼シンポジウム」が開催された(2013年7月13日、甲南大学)。また、第28回リカードウ研究会は「羽鳥卓也先生追悼研究会」として開催され、服部正治、新村聡、千賀重義、渡会勝義の各氏をパネリストとして、シンポジウム形式の議論が行われた(2013年12月25日、明治大学)。
- 3) 『経済学史学会ニュース』第41号には藤本建夫氏が追悼文を寄稿した(藤本 2013)。また、『マルサス学会年報』第22号には八木紀一郎氏が寄稿した(八木 2013)。
- 4) 羽鳥自身によると、彼の古典派経済学研究の第1部が『市民革命思想の展開』、第2部が『古典派資本蓄積論の研究』であり、前者では古典派のヴィジョンを追求するべく社会思想史の領域を検討し、後者ではそれを踏まえて経済理論史を検討するものであるという(羽鳥 1965, pp.283-84)。
- 5) 羽鳥は1965年の第29回経済学史学会大会において、報告「初期リカードウの分配論」を行うとともに(1965年9月25日、小樽商科大学)、論文「初期リカードウの価値と分配の理論」を発表した(羽鳥 1965、羽鳥 1972に所収)。
- 6) 羽鳥はマルサス学会でも活発に活動し、晩年まで日本の古典派経済学研究の発展に貢献した。最後の著作

- となった『経済学の地下水脈』は羽鳥と彼の教え子たちとの共著であり、ここでも羽鳥は長大な論文「マルサスの戦後不況論」を寄稿している（藤本 2013）。
- 7) スラッファによると、1814年6月26日付のリカードのマルサス宛書簡(50)の中で、リカードは利潤率は「生産の比率」に依存すると述べている（RW, VI, p.108）。1814年8月5日付のマルサスのリカード宛書簡(54)の中で、マルサスはリカードが「物的比率」に言及することを批判している（RW, VI, p.117）。1815年2月刊行の『試論』の「地代と利潤の増進を示す表」の中で、リカードは利潤率の変化を「穀物比率」を用いて説明している（RW, IV, p.17）。
- 8) スラッファの「穀物比率論」解釈に対する羽鳥の批判については、福田 2008, p.46を参照。
- 9) 1820年6月13日付のリカードのマカロック宛書簡(368)の中で、リカードは「地代は最後に用いられた資本をもって生産された穀物と、工場において労働によって生産されたすべての商品に基づいて片付けることができますが、地代を片付けると、資本家と労働者の間の分配はずっと単純な問題になります。労働者に与えられる労働の結果の分け前が大きいほど、資本家に帰する利潤の率は小さくなり、反対の場合には逆になるでしょう。」と述べている（RW, VIII, p.194）。
- 10) 『原理』初版の第1章価値論の中で、リカードはアダム・スミスが労働価値理論の適用範囲を「資本の蓄積と土地の占有とに先行する初期未開の社会状態」に限定したことを批判した（RW, I, p.23n）。また、1818年12月28日付のリカードのミル宛書簡(298)の中で、リカードは「交換価値が変化するのは、利潤と賃銀とへのこの分割のためではなく、——資本が蓄積されるためではなく、それは社会のあらゆる段階においてただ2つの理由のために生ずるのであり、その一つは所用される労働量が多いか少ないか、他は資本の耐久度が大きいか小さいかということだ」と主張した（RW, VII, p.377）。
- 11) 『原理』の理論構造（章別構成）の問題については、福田 2006, pp.166-69を参照。
- 12) シンポジウム「リカードゥ研究における西欧と日本」では、報告者：羽鳥卓也、中村廣治、千賀重義、討論者：真実一男、時永淑、森茂也、坂本弥三郎、溝川喜一、豊倉三子雄、司会者：玉野井芳郎、記録係：入江奨という陣容で、リカード研究について議論が行われた。後日、記録係の入江が「学界展望」（入江 1973）を執筆した。
- 13) 書簡(50)の叙述の中の「この比率」が何を指すのかが解釈を左右する。羽鳥はこの時期のリカードが「生産の比率」を農業部門の投入-産出比率の意味で使用していることから、賃金に依存する「この比率」は「生産の比率」ではなく、冒頭の「利潤率」を指すと見なした。従って、工業部門では、「食糧の安価さ」が「労働賃金」を通して「この比率」＝「利潤率」を規定するという解釈が成立する（羽鳥 1982, pp.43-44n）。
- 14) 千賀の「部門別利潤率規定論」解釈をめぐる議論については、福田 2008, pp.47-50を参照。
- 15) クルツの書簡(368)の解釈をめぐる問題については、福田 2013, pp.166-68を参照。
- 16) 『マルサス評注』第5章第4節において、リカードは「考えられうる限りの最も完全な価値の尺度にも、この除去されえぬ不完全さがあり、どのような修正がなされねばならないにせよ、私はこれに対して持ち出すべき異論は持っていない。この不完全さのために若干の商品はある方向に、若干の商品は反対の方向に影響を受けるかもしれないが、しかし一般的な平均では大きな影響は受けまいであろう。一般的原理は、尺度に必然的にとまらぬ不完全さによっては、少しも損なわれるものではない。」と述べた（RW, II, p.288）。
- 17) 1823年9月5日付のリカードのミル宛書簡(552)は、リカードが遺稿となった『絶対価値と相対価値』の執筆を終えた頃であり、9月11日に他界する直前に書かれたものである。『絶対価値と相対価値』では、リカードは平均的な資本構成をもち、かつ食糧生産と等しい資本構成をもつ価値尺度を提案したが、それでもなお、リカードは満足できなかったのである（RW, IV, pp.405-6）。
- 18) 羽鳥は『古典派経済学の基本問題』の「あとがき」でも、同様の研究方法を提示した。すなわち、「学史研究の究極の目的は、ただ単に過去の学説の内容を正確に理解することだけに局限されるべきではなく、そこから進んで、これを媒介にして資本主義経済のメカニズムの科学的分析にとって有効な迂回的手段を提供す

ることにおかれなければならないであろう。」「かりに、どれほど鋭い問題意識をもった批判的学史研究を企てたところで、対象それ自体に内在するという手続きを踏んでいなければ、古典派経済学説の虚像を描き出して、これを既成の理論によって裁断するというだけの結果に終わるほかないだろう。」(羽鳥 1972, pp.411-12)

参考文献

- Kurz, H.D. 2011, On David Ricardo's Theory of Profits: The Laws of Distribution Are Not Essentially Connected with the Doctrine of Value, *History of Economic Thought*, 53 (1), pp.1-20.
- Hollander, S. 1973, Ricardo's Analysis of the Profit Rate, 1813-15, *Economica*, 40, pp.260-82.
- Ricardo, D., Sraffa, P. (ed.) 1951-73, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols, Cambridge: Cambridge University Press. 堀 経夫他(訳) 1969-99 『デイヴィッド・リカード全集』全11巻, 雄松堂書店
- Sraffa, P. 1951, Introduction, in Ricardo, D., Sraffa, P. (ed.) 1951-73, vol 1, pp.xiii-lxii. 堀 経夫他(訳) 1969-99, 第1巻, pp.xxiii-lxxxiii.
- 藤本建夫 2013 「[追悼] 羽鳥卓也会員 —羽鳥先生の『最後の仕事』—」『経済学史学会ニュース』41, pp.19-20.
- 福田進治 2006 『リカードの経済理論』日本経済評論社
- 福田進治 2008 「日本の初期リカード研究」『人文社会論叢 社会科学篇』20, pp.41-62.
- 福田進治 2013a 「初期リカードの利潤理論」『人文社会論叢 社会科学篇』29, pp.155-72.
- 福田進治 2013b 「日本のリカード研究 —労働価値理論を中心に—」『マルサス学会年報』23, pp.1-33.
- 藤田五郎・羽鳥卓也 1951 『近世封建社会の構造』御茶の水書房
- 羽鳥卓也 1954 『近世日本社会史研究』未来社
- 羽鳥卓也 1957 『市民革命思想の展開』御茶の水書房
- 羽鳥卓也 1963 『古典派資本蓄積論の研究』未来社
- 羽鳥卓也 1965 「初期リカードの価値と分配の理論」『商学論集』34(3), pp.91-151.
- 羽鳥卓也 1972 『古典派経済学の基本問題』未来社
- 羽鳥卓也 1982 『リカード研究』未来社
- 羽鳥卓也 1990 『国富論研究』未来社
- 羽鳥卓也 1995 『リカードの理論圏』世界書院
- 羽鳥卓也・藤本建夫・坂本 正・玉井金五 2012 『経済学の地下水脈』晃洋書房
- 入江 奨 1973 「[学界展望] リカード研究における西欧と日本」『経済学史学会年報』11, pp.11-20.
- 真実一男 2000 「我国の戦後リカード研究の回顧」『経済学史学会年報』38, pp.76-82.
- 水田 健 1985 「リカード研究」『経済学史学会年報』23, pp.13-22.
- 中村廣治 2007 「わが国におけるリカード研究」『商経論叢』43(1), pp.67-77.
- 千賀重義 1972 「初期リカードにおける価値と貨幣の理論」『経済科学』19(3), pp.91-114.
- 千賀重義 2006 「デイヴィッド・リカード」, 鈴木信雄(編) 『経済学の古典的世界1』日本経済評論社, pp.175-222.
- 八木紀一郎 2013 「[追悼記事] 羽鳥卓也先生追悼」『マルサス学会年報』22, pp.121-23.